

影芝居鸚鵡の人真似

074788-000-3

特63-956

影芝居鸚鵡の人真似

梨園道人 (井沢菊太郎) / 編

M18

CEK-0095



136
8
0/1

八集の四三由は
八集八日八日集

選之集の八集

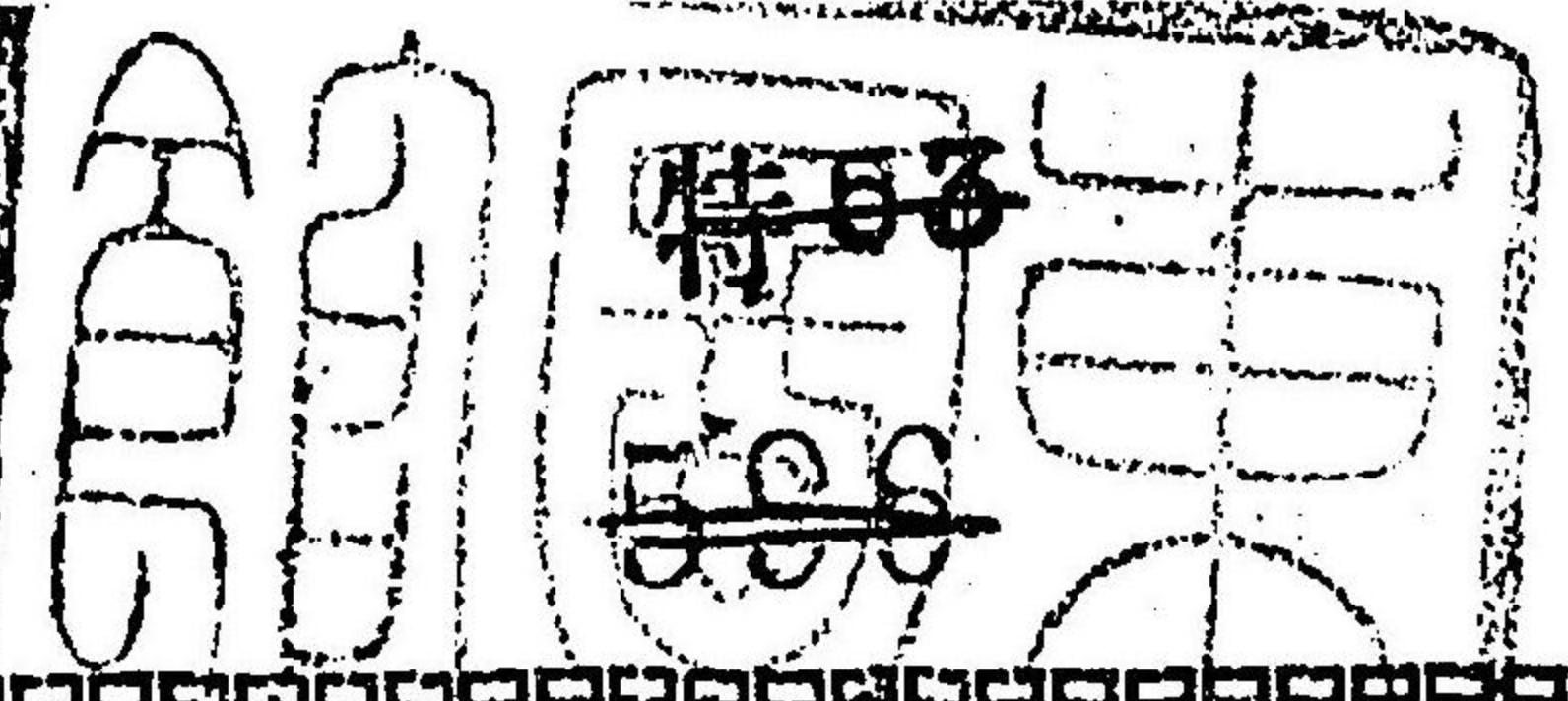
角編の
八集の八日



新古今のあはれ
時代あはれのあはれ

新古今のあはれ

編纂人 村松道太郎



○影芝居鷓鴣の人真似序

名聲色ひとりげいよ

人生凡五十年じんせいおんごねん嘗じつ一日の戯場しごばの如しと實まことや母の胎内たいないを

生うま出いる發端はつたんより命終いのちおとるの大詰おほつゆめ迄大千世界ちせんせかいの本舞臺ほんぶたいに善

惡あく邪じや曲まがの兩花道表りゅうかどうに忠孝ちゆうかうの看板かんばんと出いせと心こころの樂屋調がくやとの

腹はらを見透みすかされ謀まかるくと思おもひの外ほか又謀またら

るの後悔こうかい有あるひ手詰てづめの金故かねゆゑに身售みうりの愁歎しうたん晦日みかの混こん膽たん

四季折々の移更しりかへにの綿入わたいれ忽地單たちまちひとへと成一足飛なるいっせくとびの早替はやがえり無

分別ぶんべつ成道行有なるみちゆきありハ胸むねと嫉妬しつとの燒耐やうたい火爾ひにハせり出だす出し世せに

大願成就と歡べと奢て次第は身上の廻無臺に成時ハ
 月日は幕のあらざる故由斷の大敵おし寄て盆と暮との
 大立廻り借る時の立役も返を時にハ敵役と朝昏日夜に
 替り行眞に浮薄の人情を天道機敷の眞中より常に上覽
 ましくして一事も善に進む者には必を餘慶を下し給へ
 バ悪人争り餘殃を遁れん嗚呼是戲場も教訓の捷徑升を
 又史に演たるを満々と首尾能すヨソ辱ねへ
 于時明治十八年水無月山開の日富士の麓草庵に於て

梨園道人述

○影芝居鸚鵡の人真似目録

一名 聲色ひとりげいあ

○新狂言鸚鵡石の部

- 霜夜鐘十字辻筈 三幕目 忍ヶ岡山下の場 九丁目
- 霜夜鐘十字辻筈 大詰 坂本杉田寓居場 十七丁目
- 霜夜鐘十字辻筈 同 同 十八丁目
- 花苜蒲慶安實記 六幕目 島の内藝子屋場 二十丁目
- 花苜蒲慶安實記 大詰 丸橋忠彌詮義場 二十三丁目

○夜討會我狩場曙 よさちそがかりせのあけぼの 大詰 おほづめ 工藤假家討入場 くどうかりやうらういのせ 三十四丁目

○夜討會我狩場曙 よさちそがかりせのあけぼの 同 おなごく 同 おなごく 三十九丁目

○夜討會我狩場曙 よさちそがかりせのあけぼの 同 おなごく 同假屋玄關口場 おなごくかりやげんかぐちのせ 四十丁目

○鳴衛月白浪 なるゑつきしろなみ 大詰 おほづめ 招魂社鳥居先場 せうこんしやとりかききのせ 四十二丁目

○時代狂言鸚鵡石の部 じたいきやうげんあひせきぶ

○勸進帳問答掛合 くわんじんちやうもんどうか 富樫介 とがしのすけ 五十八丁目

辨慶 べんけい

○伊達騒動對決の場掛合 だてそうどうたいけつ 細川勝元 ほそかてかつもと 六十七丁目

仁木彈正 にきだんじやう

曙源太 あけぼのげんた

絳紅裏甚三 せうこうらきんざ

前髪佐吉 まへがみさきち

幻長藏 まぼろしちやうざう

腕の喜三郎 うでなきざう

喜三郎妻磯 きざうめいそ

名古屋小山三 なごやこやまのせ

腰元岩橋 こしもといそせし

不破伴作 ふたへはんさく

○俠客五人男 きやくかごふにんをとこ

六十九丁目

○鞍馬山多門堂の場掛合 くらまさんたもんどうのせかけあひ

七十五丁目

○松金屋離座敷の場掛ヶ合

番頭 善六 七十九丁目

○曾我對面の場掛ヶ合

丁稚 久松 八十二丁目

○天神記車引の場掛ヶ合

王藤 祐經 八十三丁目
時平公
梅王丸
杉王丸
櫻丸
松王丸

○三門五三桐掛ヶ合

眞柴大領久吉 八十九丁目
石川五右衛門

○白蓮住家強迫の場掛ヶ合

鬼薊 清吉 九十一丁目
おさよ

○上使之場

根の井行親 九十三丁目
新宮小太郎

○拾花寺鐘樓堂の場

鍾樓守純念 九十六丁目
萩原猪助

○六段目切腹の場

早野勘平 九十九丁目

○白蓮住家強迫の場

鬼薊清吉 百一丁目
大寺正兵衛

○日枝山の段

木曾冠者義高 百四丁目

○鎌倉伊所詮義の場

伊所五郎丸 百五丁目
源の頼朝公

影芝居鷓鴣の人員似目錄終

○影芝居鷓鴣の人員似

一名 聲色獨り稽古

編者 梨園道人

○新狂言鷓鴣石の部

○霜夜鐘十字辻笠

二幕目

天狗小僧金助

○忍々岡山下の場

按摩

宗庵

○金 丹波屋といふ安泊りが表長屋に有せへり大江山の岩窟

程鬼の集まるおれが内酒呑童子を見た様は喰ひ酔てぐツす

寐込漸く灯りが附て目が覺湯へ這入らふと出掛た門口土

族の金を盗んで逃るを草履を履替追掛たが何所へ逃て行き

やアグツたか(宗)悪いとの仕ねへ物だ爰らへ來ると思ひ出
 ず(宗)三月跡(宗)三枚橋で七十圓の金(宗)目(宗)無仕馴(宗)腕(宗)の荒療
 治(宗)二才野郎(宗)を(宗)殺(宗)し(宗)札(宗)を(宗)算(宗)へ(宗)る(宗)月影(宗)も(宗)滿(宗)れ(宗)バ(宗)欠(宗)る(宗)廿(宗)日(宗)の
 月(宗)旨(宗)の(宗)仕事(宗)は(宗)魔(宗)が(宗)差(宗)て(宗)天(宗)狗(宗)小(宗)僧(宗)金(宗)助(宗)とい(宗)ふ(宗)金(宗)毘(宗)羅(宗)參(宗)り(宗)又(宗)出
 ツ(宗)く(宗)の(宗)し(宗)金(宗)の(宗)宗(宗)庵(宗)とい(宗)ふ(宗)按(宗)摩(宗)ハ(宗)上(宗)下(宗)揉(宗)で(宗)二(宗)百(宗)文(宗)と(宗)流(宗)し
 て(宗)歩(宗)行(宗)の(宗)仕事(宗)の(宗)種(宗)吹(宗)笛(宗)の(宗)音(宗)も(宗)枯(宗)る(宗)哀(宗)れ(宗)な(宗)嘶(宗)で(宗)氣(宗)を(宗)ゆる(宗)さ
 せ(宗)盗(宗)み(宗)を(宗)働(宗)ら(宗)ぐ(宗)偽(宗)盲(宗)人(宗)杖(宗)の(宗)細(宗)い(宗)が(宗)根(宗)性(宗)ハ(宗)勝(宗)れ(宗)て(宗)太(宗)へ(宗)刑(宗)罪
 持(宗)宗(宗)首(宗)尾(宗)能(宗)お(宗)れ(宗)手(宗)入(宗)た(宗)金(宗)を(宗)横(宗)柄(宗)引(宗)浚(宗)ひ(宗)高(宗)飛(宗)を(宗)する(宗)了
 簡(宗)が(宗)雲(宗)足(宗)早(宗)と(宗)東(宗)南(宗)東(宗)風(宗)空(宗)と(宗)へ(宗)雨(宗)の(宗)破(宗)口(宗)は(宗)撞(宗)出(宗)す(宗)上(宗)野(宗)の(宗)十二

時(宗)より(宗)惡(宗)事(宗)を(宗)重(宗)ね(宗)し(宗)盜(宗)人(宗)同(宗)士(宗)金(宗)あ(宗)い(宗)つ(宗)の(宗)産(宗)れ(宗)が(宗)白(宗)里(宗)は(宗)所
 柄(宗)故(宗)宗(宗)旨(宗)の(宗)法(宗)華(宗)が(宗)古(宗)風(宗)な(宗)七(宗)も(宗)く(宗)題(宗)目(宗)を(宗)並(宗)べ(宗)立(宗)て(宗)威(宗)す(宗)から(宗)此
 方(宗)も(宗)四(宗)度(宗)の(宗)大(宗)難(宗)お(宗)首(宗)の(宗)座(宗)へ(宗)こ(宗)を(宗)直(宗)ら(宗)ね(宗)へ(宗)が(宗)苦(宗)役(宗)を(宗)仕(宗)拔(宗)た
 喰(宗)詰(宗)者(宗)宗(宗)遣(宗)る(宗)遣(宗)ら(宗)ね(宗)へ(宗)と(宗)争(宗)と(宗)ツ(宗)た(宗)が(宗)是(宗)柄(宗)屋(宗)根(宗)も(宗)白(宗)く(宗)成(宗)雪
 を(宗)見(宗)掛(宗)て(宗)佃(宗)ハ(宗)行(宗)赤(宗)い(宗)仕(宗)着(宗)を(宗)着(宗)度(宗)も(宗)ね(宗)へ(宗)から(宗)男(宗)の(宗)當(宗)ツ(宗)て(宗)碎(宗)け
 る(宗)ど(宗)お(宗)れ(宗)が(宗)體(宗)の(宗)餅(宗)焼(宗)茶(宗)碗(宗)金(宗)二(宗)ツ(宗)に(宗)割(宗)ツ(宗)て(宗)三(宗)十(宗)五(宗)圓(宗)中(宗)能(宗)分
 て(宗)別(宗)れ(宗)た(宗)が(宗)又(宗)も(宗)や(宗)今(宗)夜(宗)あ(宗)い(宗)つ(宗)が(宗)仕(宗)事(宗)お(宗)れ(宗)が(宗)見(宗)る(宗)共(宗)知(宗)ら(宗)ぬ(宗)が
 佛(宗)宗(宗)寺(宗)門(宗)前(宗)に(宗)く(宗)す(宗)ぶ(宗)ツ(宗)て(宗)土(宗)瓶(宗)の(宗)酒(宗)も(宗)香(宗)倦(宗)た(宗)是(宗)柄(宗)車(宗)で(宗)千(宗)住
 へ(宗)行(宗)縮(宗)ん(宗)だ(宗)皺(宗)を(宗)延(宗)さ(宗)ら(宗)カ(宗)金(宗)戀(宗)と(宗)無(宗)常(宗)の(宗)田(宗)甫(宗)柄(宗)又(宗)雨(宗)降(宗)か(宗)燒



三十一



三十一

場が匂ひ(宗)くせへもの身知らずと嫌がられるも合點で(金)降ねへ内にモウ一篇(宗)今度で二度ぐがあの年増に(金)居所を搜て(宗)金(逢てへ物(宗)エ、何仕やア(金)さら言ふ聲(宗)宗庵カ(宗)手前(讚岐金助カ(金)最前柄搜して居たの(宗)何も搜される覺えの無か(金)丹波屋柄手前が出るのを直に跡柄追掛たが何所で道が違ッたか餘程むだに方(搜した(宗)あらアあれから跡へ歸り坂本柄此方へ來たが何ぞおれに用があッてカ(金)用が有柄追掛て來たの(宗)もうけ口の嘶しならおれも半分乘てへ物だ(金)とりや

ア此方(言ふせり(最前手前(盗んだ金を又半分貰は來たの(宗)夫ぢやア手前(あすに居るか(金)あら波屋の裏に居るが二三日廓へ泊り込す(か)摺て仕方無に損料蒲團を引冠り朝柄寢込んで灯が附漸目(覺楊枝を遣ひ湯へ行掛に丹波屋の表で聞さやア手前の聲(テナと格子の間柄覗いて見れば違ひぬ宗庵足(搔寄懐へ財布を入(をきて來るの(宗)振を呼きた安泊りの門に手前(居様どの實はあらア知(あん(金)其時己(盗人と日迄出を吞込で手前に盗をさせ(の)直(跡柄追掛て何程有り知らねへが財

布の中なに有ある金かねを半はん分ぶんれれが貰もらふ麻あだ（宗）さう知しられたさ仕
 方うたがねへ兎うや角かう言いわずに財さい布ふの金かねを半はん分ぶん手て前まへに分わけて遣やら
 中なかにああつたの十じゅう圓げん札さつ五ご圓げんの釣つひが有ある遣やら遣やらふが無なけりやア
 翌あす日ひ迄まで預あづかりかかつて置おか（金）五ご圓げんの金かねか懐ふところにありやア寐ね臭くせへ損そん
 料れう浦ぼ團だんでくすぶぶつて居ゐやア仕しねへ釣つひのねへ柄から十じゅう圓げんををつくり
 料れう札さつが方かたへ貰もらふ（宗）夫そりやア餘あまり虫むしが宜よらふ（金）夫そち
 やア今こん夜やも十じゅう時じ前まへ兩りょう替か替かで切きつて貰もらひお色いろに半はん分ぶん夫それをよこせ
 何なにも借かりる物ものぢやアなし遣やら遣やらぬへもおれが了れう簡かん兩りょう替か屋や
 で切きつて来こいと手て前まへの差さ圖ずの（宗）おらと受うねへ癩しかに障さりやア五ご圓げん

の愚おろ五ご錢せんの錢かも遣やらぬへ（金）三さん枚まい橋はしにも徳とくねへ（未）
 とかなをいふの此この金かね助すけは見み込こめたら遣やらぬへ出で来きぬへ
 から早はやく往わう生じやうし（宗）や（宗）往わう生じやうし（宗）ねへ六十
 越こて念ねん佛ぶつを一いち度ども言いつたとのねへ後ご生じやう嫌きらひを接あ摩まの宗そう庵あん手て
 前まへ達たちが威いさう共いっしょ悔くわいり共いっしょ住じゆうねへ（宗）瘦しな皺びた腕うでに有あるとだ（金）そん
 江や野の暮ぼを言いねへで器き用ように半はん分ぶんれれによこせ（宗）洒しやう落らくッ臭くせへ
 とを言いやアぶる遣やらぬへと言いつたらどうする氣きだ（金）を
 ぬすむ物ものか腕うでで取とる

○霜夜鐘十字辻しやうやかねじゆうじゆう 坂本村杉田寓居さかほんむらすぎのたけのりやうきの場ば 天狗小僧金助てんぐこぞうきんすけ

中間の奴等が狩込れ浮くしちやア居られねへが幾ら取ても
 傍柄遣ひ物に仕様と隠て置いた証書も煙草入と一所に落し
 小遣錢もねへしまつ夫に夕夜明をじて今日落附て寐ねえ
 柄眠ぐッてぼんやりした何所ぞで一寐入してへ物だふ、コ
 リヤ能所に貸店が有る宵の内爰へ寐て夜更にあつたら羽根
 を廣げ天狗小僧も高飛ぶ又秋葉へでも出掛やうか
 ○霜夜鐘十時辻筈 坂本村杉田寓居の場 六浦正三郎
 三年前我師にと御内室に召仕の下女下男を附られて修親
 類へ遣ひされ其夜拙者をお呼被成天下治亂の談話より大義

の企て有事を密かに拙者へお明し有て同盟せよとれ勤めあ
 れと所謂嫉妬偏執の心よりして徒黨を集め其誠意立ぬ無益
 の企御身の破滅と存せし故再三再四れ諫めやせと更ふ夫を
 お用ひなく最早近きお發はる所存其幸先に其方々得心せぬ
 の露顯の元助け置れの覺期せよと我を討んと被成し故迎も
 捨る命なら天下の爲に捨るに如じし須彌滄海の大恩有る我
 師を討ひ勿体なけれと世界は爲に換難く止を得ずして討た
 る故其許格で葉の散々連書に記せし者其ハ皆九州へ落行し
 ぐ彼地で討れし事あらん其折是成連書をバ取隠せし故誰有

て謀叛を知らる者無れば我師の悪名流布致さず露顯致さば
御家名の汚れも存せし止を得也拙者々切害致して御座る

○花首蒲慶安實記

六幕目

○鳥の内藤子屋の場

吉田初右衛門
金井半兵衛

○(半)是はては悉く無き者無き又密事と云(初)手前の家て病苦
にやこのは有馬温泉お湯治を名として浪花の様子を伺ふは
正雪殿が密事の使ひお京地へ参りし加藤市右衛門に同輩を
せし熊谷三郎兵衛道より透電させし故必油断成さると正

雪殿にの駿府へ立越へ先月廿五日江戸表にの玉川上水へ毒
を流し市中へ地雷火を仕掛事を一時お發する手立又駿府な
る正雪殿にの久能山へお籠り駿府城を乗取計儀夫とへ約を
結びしは西國勢を喰留る此大坂の惣大將貴殿や拙者に今以
て早打の使ひ来らざりしは正く露顯と覺えたり(半)如何も
拙者も其通り關東がの知せを待は甲斐なく廿六日も打過
せ未だ沙汰の有ざるは不審の山(初)夫に付忠彌殿の長曾
我部の次男にて徳川家を恨むと雖とも正雪殿にの恨みも無
一味の鳥合の浪士ヨリや正敷露顯なしたるに疑ひをしと思

ふ(半)又忠彌殿に日頃大酒を好みしが其邊よりして事の
 破れと成り露顯なして召捕れしか何共以て覺束な身(初)若
 事成就せ老討手の向ふ其時の此初右衛門の切死にあす決意
 あるが半兵衛殿に如何召る(半)拙者夕所存の此身の罪を
 訴へ出上の所刑を受ける心体(初)貴殿名乗つて出られるか
 すれを罪人の名を負ね成ぬ残念故と切死に致す所存(半)
 斯迄義を變せざる吉田氏に夢とい言年(初)何夢に拙
 者を見られし夢か(半)如何も先刻見たる夢に貴殿夕上へ密
 訴あし其功に寄り助命され拙者の重と磔けに行きぬれ相果

升た(初)譬(夢)にて見らんとし其訴人杯どの穢りしされ心飽
 まで義を守り切死ふ成て相果(兩人)思えば果敢き事
 ムる

○花菖蒲慶安實記 大詰

○忠彌詮義の場
 丸橋忠彌
 松平伊豆守

(伊)忠彌(忠)ハッ(伊)其方が謀反の企て有の余人の知らせ
 伊豆守疾より推察致し居るぞ(忠)天下の智者と呼れ物に秀
 でし豆州侯殊に老中出頭にて人に尊敬されお慢じ有ての事

かひ知らぬと上へ見えぬ人心を此忠彌が心中お分り有かす
 ト夫の目違ひ(伊)イヤ先頃下城の砌り石を投込み堀の淺
 深を測量をして居たるを只者成ずと思ひしが果して江戸表
 の大將と仰がる、丸橋忠彌兼て夫と察せしが夫でも白狀致
 さぬか(忠)貴殿の目玉の拙者が腹の中透見込たと仰せ有が
 覺え無事白狀仕難しいかにも其時某しの酒に酔ひ犬を追拂
 ゐんと二ツ三ツ打附し石が思ひを堀へ入りしを夫を淺深を
 量る採との所謂自分智恵にて力負が致したのである謀
 反を企つ大將採との思ひも寄す(伊)其方が先祖の大坂方に

て名お聞えし長曾我部が三男の其方未練者ぢや(忠)何拙
 者を未練者とい(伊)弓師藤四郎が訴へと云先非後悔あして
 徒黨の者より自訴なしたるの七月廿六日の夜地雷火を以て
 所へ伏せ置き一時に出火させ市中の者動搖あす其擧を計
 して討て出御城内へ責入る計策其將たる武士も似合ぬ未練
 な奴めぢや(忠)仰せの如く我父の土佐の領主長曾我部なり
 由井が企てに加擔あしたる何故に未練白狀せんや人命
 限り有身何を覺え無事を言ぬを未練と言ふ覺え無貴殿も
 似合ぬ仰せで(伊)然らば改め其方へ問度事有抑も正雪



二十六

二十六

成其方成運なりうんみ叶かッて將軍職せいぐんしやくと成りし後此伊豆守このちのいづのみが謀反むはんを企くいだ
 て不運ふうんにして捕れ其方そのほうが役人やくにん共に吟味ぎんみをさせても一向かうし知ら
 ぬと申張らまバ夫それにて打捨置うちすておくの白狀しろじやうさせねバ天下てんか役人やくにんの環瑾かきん
 左さする事ことある時ときの忠彌ちゆうや我われの何なんと致いたすや(忠)何事なにごとのお尋ね成たづ
 りと思おもひの外脇道ほろわきみちのね尋ね某それがし長曾我部ちやうそがべの二男ふたにの乍ちら父ちちの再さい
 度迄まで滂當家たうたうけに敵對てきたいし故終ゆえつひに梟木けうぼくに迄掛までかけられ某それがしの寶藏院流ほうざういんりう
 の鎗やりの指南しきあんをし幽かすのかすに暮くせしが生來せいらいの大酒たいしゆ故諸方たしゆしよより借財やくざい
 多おほくりやうな者ものに妻つまをやり置おかを後日ごじついか成難義なるがたがりゝらん
 と舅藤四郎しやうとが娘むすめを取返とりかへさん為ために跡方あとがたも無謀反むぼうはんの企くいだてと訴うったへ

出我いでわれを召捕めいとらせ然しかして娘むすめを離縁りえんさせんと計てかりしに疑うたがひ無是むし
 に付つけてもせつを離縁りえん致いたささ傍かたはらに置おきしが我誤わがあやまり今いまれ咄ぞ
 しの事更ことさらに分わからぬ馬うまの耳みみに何なとやら(伊)文部いぶに秀ひいでし身みを
 以もつて今いまの利解りかい分わらぬとの異いちや今いま一應いちおう申聞まをきすが正雪しやうせつ
 が此度このたびの企くはたての其身そのみ天下てんかの勤王きんわうたる楠くすの正成せいせいが後胤ごいんなりと
 人ひとを馴なける為ためと云いひ二ツに勤王きんわう無二むにの流ながれ故夫ゆゑとれを表おもてに一味いみ
 を付つけきと正雪しやうせつの誠まことに楠家くすけの嫡流ちやくりう成なりず其實そのじつハ駿州すんしゆ由井村ゆいむら紺
 屋治右衛門やぢゑもんが倅せがれ富士太郎ふじたろうと云下賤げせんの者もの去みバ一味いみのの者もの皆名みな
 も無浪人なげらうにん故終ゆゑつひに事成ことごとずして露顯ろけんに及およびしなりされ共一味ともいみを

あつめ これきんわち 是勤王の名有故成なれ共事を果さぬは是れぞ天理の
 叶ぬ所コリヤ忠彌如何思ふぞ(忠)仰せの如く正雪が諂ひ
 武士の手を借さ及む迄も企てしは是憶川の威風も忽ち諂
 ふ二股武士の大小名をかたぐひ必らず事の破れと知り夫
 故大坂以來億川も隨身せぬ諸浪人をかたらひしは是大丈夫
 の致す處正雪自殺致せし事ならざる計りで無外に仔細の
 有事ならん此忠彌を文武に秀でしなど、れ譽め有る億川
 流の諂ひ詞此忠彌の生死の程早く聞せ下されい(伊)罪も
 伏さず死を望むは是匹夫の爲事大丈夫との言難し上の役人

へ數日の手敷を掛るは無益のと夫を辨まへぬ汝にてはよも
 有まじ得と思慮して返答致せ(忠)どう思慮を致しても覺あ
 けきは無益と知と幾等お尋有てもいつも一ツとをや上ねば
 あらぬ故早く手強い拷問をして責殺して下され(伊)だまれ
 忠彌先年大坂落城の砌り父元親法に依て梟木に掛けられ
 しを無念に思ひ億川の將軍家を恨正雪に一味あし万一成就
 なさむ己れ正雪を討て自ら將軍職と成んとの底意道に背き
 して故熟醉あして一大事を鼻に洩せしも是天に口無人を以
 て言まむるの譬へ町人ですら藤四郎の伊國恩を辨まへ我子

を捨て訴へ出る今正雪の自殺なし諸浪人よも夫々所置を付
 しよ汝計りや白状せず強情張は匹夫の勇汝伏罪せぬ時は下
 万民の爲ならず今と成て未練を云は長曾我部が子孫なりと
 の言難き天下の大法辨まへざる奴ぢや(忠)ム、(伊)黙しを
 るは恐入しか(忠)先刻もやせし通り息切が致て苦ふムれば
 貴殿のお手自水を一番頂戴致したい(伊)身共が手より貰ひ
 度どか(忠)いかおも砂利の上につくばム居る匹夫ならバ手
 桶の水を三拜あして呑むで有うが此忠彌の豆州侯のお手自
 貰つて一はい呑度のだ(伊)コリヤ清き水を是へもてイヤ彼

も元ハ四國土佐の領主昔しを言を同じ大名夫故水を遣はす
 のちや「其方望みよ任せ水を遣はすぞよ(忠)ハッ 忝ふム
 るヌ、宜心持ぐイヤ甘露の味が仕る(伊)天下の老中伊豆
 守が手づから遣はす其水夫で望をが叶ひし(忠)思ひ置と
 ムり升ぬ(伊)ム、左様か(忠)是迄天下の諸役人に長く御苦
 勞掛ましたが當時老中出頭伊豆守殿お給仕をさせ水を呑
 しの將軍同前是よて天下を取し心に今社犯す身の科を逐一
 白状致すでムる(伊)スリヤ白状成とか(忠)抑謀反の起りの
 我父元親梟木に掛られし恨み何卒晴さんと思ふ折柄正雪が

企て幸ひと一味あり玉川上水へ毒を流し一時に舞鶴城を乗
 取天下を奪はんと思せしが事成せして繩目の耻辱されども天
 下を奪んとする心一時も忘れざれば其一念晴し度豆州侯へ
 氷を乞しに流石名智の老職我胸中を察し手づから氷を下
 されし御厚志に依て斯白狀致してゐる(伊)ホ、ウ能ぞ白狀
 いたせしぞ(忠)イテ此上ハ謀反の大罪重き所刑に行ひ下さ
 れ(伊)忠彌が罪に伏せし上は夫々所刑の沙汰及ばん

○夜討曾我狩場曙

○工藤假家討入の場

十長祐成

五良時致

(十郎)是まで來たる其内も數十の假家數十の關門危ふかり
 しもやうく免がれ是までまゐりしハ神の加護(五郎)向ひ
 の假家の千葉が警衛もいや祐つねが狩家へ近付いんがも
 し關門にていなとやさばすぐに其場で討出ん(十)イヤく
 早まるな今が大事ひをに致せ(勢子)コリヤく夫へ參ッ
 たいづれの者ぢや姓名を名乗れよ(十五)ハ決して怪し
 き者にあらず我等二人は假家の内へ使ひあつて參りしもの
 あり(勢子)シテウの先いづれあるぞ口をもち合點行せ
 譬へいづれの使ひたり共姓名を名乗ずして通路あるんとい

たせし如何にも不審と覺えたり通す事はあらぬ(十)
 其不審のこもつとも我等の御内方のもの共に是迄所々の
 木戸固めも仔細なく通りしあり(勢子)シテ内方どの誰か
 らん其姓名を明かかに名のらざれば通し難しるれども通路
 の切手あらば見せられ(十)イヤさやうに重きものよあら
 ず苗字もあらぬ匹夫の兩人(勢子)姓名名のらづ通路の切手
 なくば是より跡を戻られよ(五)スリヤいよく此木戸明て
 の下さらぬか(勢子)いかにも(五)通さぬとあらば是非がな
 ら我等の假家の内へ強盗入るものありとやめん奴らの片

ツ端此どころにて討捨るぞ(勢子)扱こそ狼藉ソレもの共
 (十)イヤ決して怪しきものにあらず此もののみ只今参る途中
 にて存じがけなき酒の馳走匹夫の證據度をすこし前後も分
 ぬ此酩酊それゆゑ強盗をぞとやせとこれの全く酒狂の上何
 どぞ木戸を通され(勢子)シテ内身らが主人とやいづれ
 の内方是にて包まぬ中なば通してやらん(十)われく二人
 をお見知りなきや聽南殿の家臣にて彌源太彌源次とやす兄
 弟あり殿の役をわづかりて今度も富士の牧狩お供いたし
 て各々がたふも面會せり忘れたまふな身覺らう(勢子甲)

成はど彌源次とやらい見わすれしが身みの聊なほか見覺みえあり
 日外宇都宮殿片瀬よりお歸りのその時とき面會めんかいいさせし馬うまとり
 兄弟然も其時にこり酒に酔を發し兄弟うかれて舞し仁玉舞
 一層肴に相成しがその時の雜人こりや盜賊たうぞくぞでいムり升
 ぬ勢子乙おつ斯見知り人のある上うへ此木戸通しつかいさん
 十ととりやお通し下さるかこりや彌源次無禮のお詫をいた
 せ勢子イヤ其詫より今すし仁玉舞のトさしを此處に
 て舞て見せよ十イヤ舞を舞ふいと安けれと主君の御用
 達せし上又ぞろこれへ参るでムらふ勢子然らばふた、び

参りし上仁玉の舞を所望いたさん十左様ムればいづれも
 方勢子歸りを相まられるぞ十イヤ關門を十、五お開
 きくだされ

○夜討會我狩場曙 ○工藤假家討入の場
 十良祐成
 五良時致

五い兄上十時致○是まで忍びいつこれと目ざす敵の工藤
 祐つね俄かに寢所をかへと見えす、む所に居らざるの未
 だ天運來らざるカ五早くもさつし臥房をかへしかアラ殘
 念口をしや龜ぬぐらさまよら浦千鳥波にゆらる、沖津船

まゐるべの山やまのこあたどや底うそことも知らぬ夜の波風なみかぜをたよりの
湊入りみなり心付こころづをや闇やみの空そら○イザやこなたへ

○同假家玄關口の場かりやけんくわんぐち

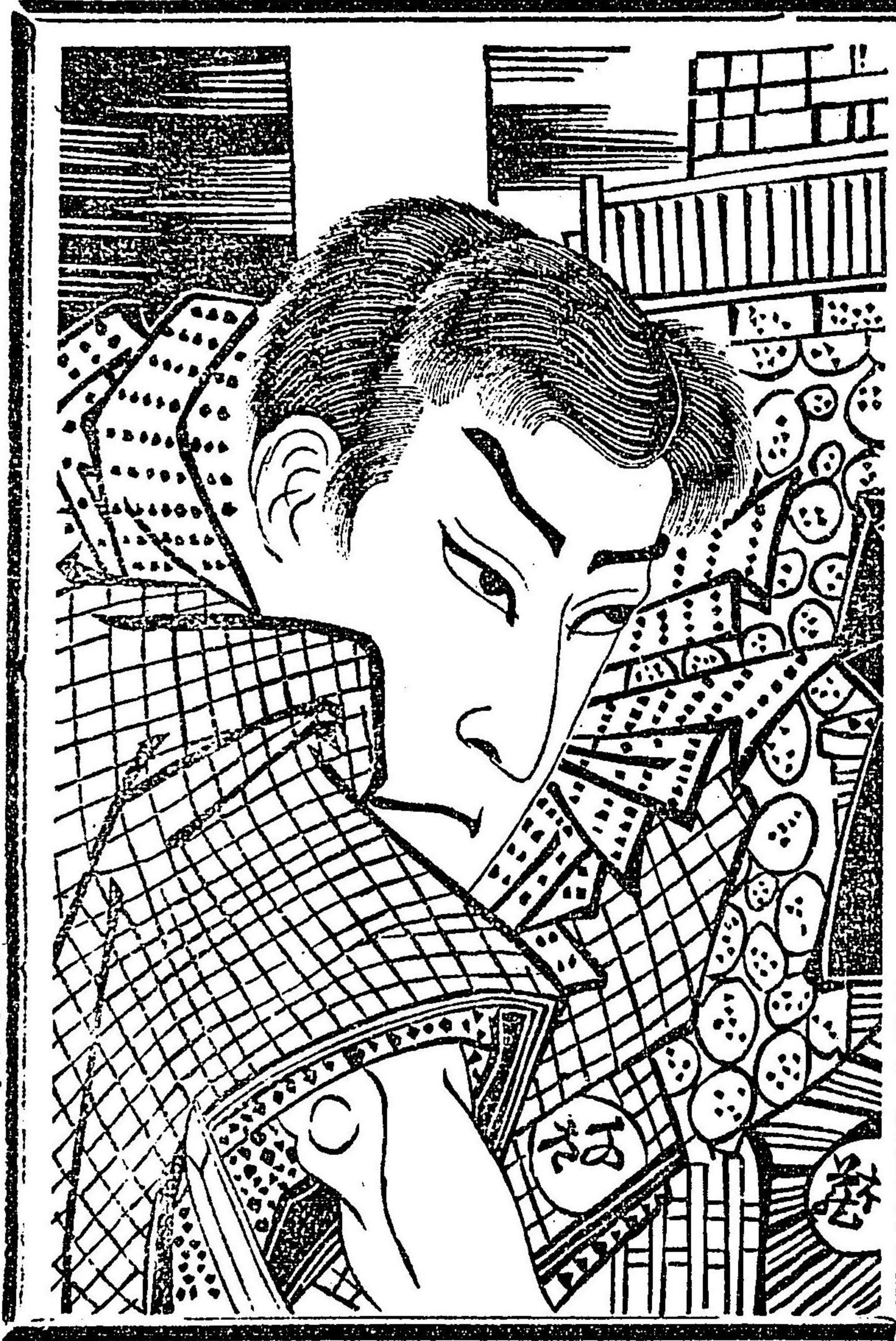
(五)十ウづ、に當あたの敵かたきをうちし跡あと四十のをのこ四ツよ成り
けり(十)オ、能たつ仕つかたり今際いまの秀歌しうか時致集ときぢしゅうとも召めれおん
(兩人)ム、ハ(十)もはや此世このよに思おもひ置事おくことあしいまを最期さいご
の門出かどでのさるづさせめて軒端のきばの雨霰あめしゆくうけて弟あとうへ水みづさりづき
(兩人)南無なむあみぶ佛ぶつく(五)イデ思おもひ置事おくこと更さらまおし兄弟名あやうだいな
のつていふぎよく(十)討死うちじなして美名ひめいを殘のこさん

○島衛月白浪しまづとりつきのしらなみ

○招魂社鳥居先の場せうこんしやどりぬまき

野州徳、松島千太
望月輝、明石の島藏

(島藏)凡おほを盗ぬそをしる者ものの人間まんにん一生いせう五十の坂さかを越こえたる者ものの無な廿
五あいつの曉迄あつしま天てんの罰ばつを蒙かぶつて長ながく生いて居ゐられ無なは是これ皆みな惡事あくじを
した報むくいといつア心こころを改あらためへにヤア成な無事むじと氣きが付つてすつ
をり止やめて仕舞し其時調度まじのときぢうど四百圓よひやくえん殘のこつた故ゆゑ五百圓ごひやくえんに是これを纏まとめ福ふく
島しまやへ返かへした上うへ自首じしゆして上かみの滲所刑受誠しよせいのけまことの人ひとに成積つみり今いまの
堅氣かたきな小賣酒こうりさかや此譯故このわけゆゑ手前てめへの頼たのみ聞きれ無な千せん夫それヂヤア
福島ふくしまの亭主ていしゆの足あしを切きつ日ひと同おなじ廿日にじふにちの其晚そのばんに息子かそこが怪我けが



を仕所柄臆病風にさるひれて弱心になつたの(島)悪
 事の報を知ら柄弱い心に成たの(島)福島やが零落して今
 宮比町にのすうな住居昨日醬油を持て行た時切迫につまた
 上百圓お娘を藝者に仕様と言を見兼て百圓金を返し十分一
 の報いをあし残りの金の四百圓返して直に自首仕様と思へ
 明石柄尋ねて來た親仁に此様歎きを懸舞と據無延した
 處へ計らず手前が尋ねて來て内の人目が多故爰迄來て話の
 だ此譯故よよしみ甲斐の無奴と思ふ(島)福島
 免て吳(千)随分お前も是迄の情を知ら無人だつ(島)福島

やの一件で天の罰がわたる日お前計りの己も罰があ
 らなくつての(島)福島屋も商賣柄おいの物で
 も造て賣の報い(島)福島屋も商賣柄おいの物で
 天の懲しめ其様奴へ金を返(島)馬鹿氣て居夫より今夜一所
 に行て吳(島)幾度云てもふつ(島)止た柄此頼みの聞れ無一
 人行す(島)手めへもよせ(千)今更云ても仕方が無が佃あゐる
 時貝完の破で互に腕を切血汐を吞で兄弟の縁を結んだ其時
 に是柄先の生死を一所に爲様と云たのをよもや忘れの仕舞
 夫を頼みを聞ぬの(島)余りよしみが無ぢやア無か(島)イヤよ

しみぢ有柄留るのどごんな遺恨の有か知らねど今夜望月の
 家へ切込で向ふの二人を殺した上金をさらつて逃れた所の昨
 日ゆすりに行た柄の上の目申が付て居夫柄夫へ電信で知ら
 せが廻れバ三日と待た送りよなれば譬へ千圓盗だとして遣ッ
 た金の五十の百圓僅ち金で命を捨るの余り馬鹿な事ぢやア
 無か手前も己の異見に就てすつぱりど心を改ため堅氣にあ
 つたら何處が何處迄兄弟分のよしみを思ひ己が世話をして
 遣柄二ツに別た五百圓丸で出来ずば幾らでも金を工風へ福
 島やへ返しの上で一所よ罪を名乗て出る(千)お前も四十に

成無が大そう焼が廻ツたな自首して出ても一等減じゝ所が
 十年の苦役を佃でせねばなら無か前も余枚馬鹿氣て居るせ
 (島)イヤく十年苦役をすると云のの手前が小さい了簡盜
 んだ金を先へ返し改心をして自首すればお上のお慈悲で二
 等も減じ七年か五年に成懲役中に身を慎み大專に勤めて初
 犯か再犯で満期で出て來者が有たらバ跡先見ぞの窃盜に惡
 事をすれば天の罰有證據の己が倅がうくと論して心を
 和げさせ萬に一人り改心したらお上へ忠節夫が役人方のお
 目に止らば五年も減じて三年となるの其身の行ひ次第數年

の罪も佃へ流誠の人に成る後一生懸命に稼いだなら再度
 天の恵みがあるう是が舊幕時分なら十圓柄の死罪にされ迎
 も死ぬあら行懸の駄賃と言も有ければ今へお上は所刑替
 り千圓盗だ強盗でも一命助終身懲役親柄貫つた大事の身
 躰粗末にせせと心を入替堅氣にされ(千)お前の親仁や妹よ
 可憐悴もある柄心を改ためる氣にあつたらうか己の親も兄
 弟も無柄一生涯盗をして切れて死んでも本望(島)夫の
 余り手前の愚だ譬此世に居無とも草葉の景でどの位の氣を
 もんで居か知無死で仕舞バ空お返り跡方も無物あらバ朝廷

初め華族方で先祖の祭りをなさる物の其惡事をさつたり止
 冥途の親達に喜ませる(千)何喜こばせるよ及ぶ物か奴が勝
 手に己を産へ恩もなければ義理もねへ勝手に苦勞をするが
 (島)手前これ程譯ら無でくの棒どの思のあんづけふ
 のふ口の聞無柄如何共勝手おしろ(千)オ、しなくつてどう
 する物か兄弟分に成時に生死を一所に仕様と言乍己が頼を
 聞いて呉を心縁を切てあの他人今夜是柄切り込んでくれ
 へ込ぐら其時のお前を呼によこす柄仕度をしてまつておね
 へ(島)それじゃア是程譯を云ても己が言事を利無か(千)兄

弟分たふんから兄あにだ柄聞かきき前まへが他人たみんよなれば五分ぶと五分ぶ(島)又此方またこつちも他人たみんとありやア自首じしゆして手前てめへに繩なわを懸かける柄からひさやう未練みれんに遯ひげるナ(千)何時いつでも迎むかひに來こいどうせ輝あきの内うちへ切込きりこバ命いのち懸かけ二人殺ころすも三人殺ころすも取とれる首くびの只ただ一ひとつツ悪わるく留立とめてしやアダると島藏しまざう奴われも命いのちが無なぞ(島)是これをとりやア素人しらうに云いせりよだ己おれよ云いのの釋迦しやくよ説法せつぽう忘れわすれも仕舞しめ佃つくだよるた時ときねつきの世せ話わよ成なつたが縁えんで兄弟分きやうだいぶんの義ぎを結強盜むそびがうたうをする威おこし文句もんくの己おれが教おしへて遣やつたのだ鼠小僧ねづみこぞうの暗やみの夜よよ向むふ々見みえたと云い事ことだが餘あんまり向むかふの見みえ無な奴やつだ即善信士そくぜんしんしの墓つかへ參まゐり櫛しの水みづでも香のんで

置おけをんだ威おこしよとすを抜ぬて夫それで手前てめへの切きる了簡れうけんか石碑せきひの角かどのかけやうが己おれがあたまいりけねへぞサア切きれるから切きて見みろ(千)オ、切きねへでどうするものか(島)サア千太ちんたい今手いまて前まへを殺ころすのの有う無むをいはせぬひとづさだぞ命いのちを捨すてても改心かしんし無なか(千)誰たれが改心かいしんする物ものか殺ころすと云いから早はやく殺ころせ己おれを殺ころせば手前てめへの解死げし人獨ひとひとりの死しを無殺なへころして吳くれ(島)悪わるい奴やつでも人獨ひとひとり殺ころせば死しぬのの覺悟かくごの前まへだ(千)サア覺悟かくごなら早はやく殺ころせサア殺ころせ(島)オ、殺ころせと云いから殺ころして遣やつふ賣詞うりことせよ買詞かひことせで殺ころせと云いから今殺いまころすが悪わるい事ことと氣きが付つて盜ぬそを止やめる事ことからバ何ど

所こがどこ迄まで引受ひきうけて牛涯しやうがい世話せわをして遣氣やんきだいつう盗ぬすだ五百圓あひゃん
 も福嶋ふくしまやへ己おれが返かへして遣やふから改心かいしんしろ人の性せいの善成ぜんせいと心こころが
 付つて止やめる上うへのかみのお慈悲じひも有事あることだ爰こゝが生死しやうじの界さかひだ能了よくれつ簡げんを
 付つて見みるサア改心かいしんして呉くれるかどうだ無詞なまじてゐていわから無ね
 サアどうする○千ちコレ兄貴あにきうんよんして呉くれお前めへへ異見いけんです
 つぱりと己おれア今日けふ柄改心からかいあんした○島しまソリヤ改心かいしんしたか○千ちオ
 、是こゝがせむに居おられる物ものう五年ごねん此方このかた兄弟あにがたの縁えんを結むすんだ中なかだ
 と云いて己おれの様やうを人ひとで無なしを愛想あいそも盡つかさず幾度いくばくと無真身なごしんみも及およぬ
 異見いけんけふと云いふ今日けふ肝かんよこたへ己おれアすつぱり改心かいしんした○島しまそ

うして望月もちづきへ切込事きりこみごとも思おもひきつさう○千ちオ、夫それもすつをり
 思おもひきつた○島しま夫それで己おれも安心あんしんした○野州のしゅう徳とく旦那様だんなさま湯免ゆめんあす
 つて下くださひまし○島しまヤ手前てめへの徳藏とくざうか○徳とく千太ちたさんが来たき斗たか
 りで今日けふ迄まで隠かくした素性そせうが知しれ最早もともな長居ながいの出来でき無なと路用ろように仕し
 様やうと箆たんす筒す柄から着類きりあひと脇差わきざしを盗出ぬすし此鳥居このとりかの影かげへ隠かくして置おふと
 思おもつて蚊あや蚊かに喰くれた所ところが今和良いまわらが千太ちたさんへの御異見ごいけん今夜こんや
 盗ぬすだ物ものを賣うつ所ところが僅わずかな金かねで又また一年ねんの懲役ちやうえきの苦役くえきをせねばあ
 らねへ柄から今日けふ限り私わたしも悪い心わるいこころを改あらため升柄からどうぞゆるし何卒なんぞ免ゆるて下くださ
 りませ○島しま手前てめへも心こころを改あらためた盗ぬすんぶ罪つみの免ゆるて遣やる○徳とく夫それ

有難ふムり升(千)今又兄貴が異見にて徳も改心すると云
 の大きな規模夫にしてもいつぞや盗んだ五百圓返し度も盗
 みを仕無日(千)五百圓の扱置て五圓の金も出来無千太さし
 わたつて望月から百圓取より當(千)無(島)其望月が懇意故此
 短刀を二百圓に賣(千)夫にて三百圓未二百圓足ねへ(千)盗
 みを止て(千)一圓でも金の出来様當(千)無(輝)其二百圓の用達
 ませ(島)ヤさうおつしやる(千)望月様か(輝)島藏殿に
 の初てあれ(千)千太殿の昨日宅で面會なせしが麴町を歸り懸
 ひそく話(千)何事あるかと聞共なし(千)小蔭よて一部始終を

聞し故(千)二百圓を進上(千)島(千)二百圓をお恵み下さる
 と(輝)島藏殿へ寸志の謝禮(島)と(千)又何故(輝)サア意恨
 に依て千太殿が今宵邸宅へ切込(千)不意のと故討る(千)か運能
 命助かる共(千)いかある深手を負(千)も知(千)危(千)災難のタれし
 も島藏殿が止めし故恩義お報(千)二百圓(千)か(千)るお慈悲な
 お方共知(千)今宵切込(千)仕舞(千)首を切れる(千)ところ(輝)以前
 の拙者も同(千)仲間今改心せし(千)とを聞(千)其心ざしを喜んで二
 百圓進上(千)す(千)其お詞よあまへて(千)願(千)す(千)昨日遣(千)ふと
 おつしやつた手切の百圓千太に何卒下(千)さいまし(島)又道具

屋藤助方やとうすけお咄えましやせし此短刀このたんたうたか高い物ものが二百圓に（耀）そのたの其頼そのたのみ聞きき届とどた一旦千太殿たんとらへ遣やふと云いた百圓こと殊ことに所望しよまつの其短刀そのたんたう（島）正宗成まさはるなりとやせ共銘ともめいもあらざる脇差わきざしをば（輝）このやまサ其脇差そのわきざしの先祖せんぞより家いへお傳つたへる無銘むめいの正宗重器まさはるちゆうきも瓦解がかいの其折そのをりに一度他たひた人の手にんてへ渡わたしを計えからせ我手わがてへ戻もどり故高價ゆあかうかをいどのを求め度もとめたし（島）其それよて千太たの分ぶんも五百圓またせんこくよくしよ又先刻福島またせんこくよくしよやへ惠めぐみし百圓のこ残りのこ四百圓ひゃくよの親仁おやぢお預あづけ置おたれば員數ゐんすうも揃そろ五百圓ひゃくよ（德）夫それも天てんのお惠めぐみみならん（島）爰こゝへ持もつて來きた証書しやうしよの此四月このしやうが奥山おくやまで手てに入いらた千圓かきせんの貸金証書かきせん是これをけふ迄までき持もつてゐたも福島ふくしまやが難儀なんぎも追お

るをのむいし証文しやうもん是これも添そへて返かへし（千）すぐみ兩人警察署りやうにんけいさつしよへ罪つみの次第しだいを自首じしゆなさん（輝）お上かみにおいても特別とくべつのかあらず輕かろきは所刑有こしよけいありん（德）此事このことが新聞しんぶんへ出でたふを賊ぞくの能教よきおしへ（島）是これと云いの望月もちづき様の皆みなお情なさけ（輝）助力ちよりきいたすも其以前そのいぜん此身このみも同おなじ白浪しろなみに（千）こゝに打寄人うちよるひとくぐり（德）濱なみの眞妙まきまの窃盜せつたうより（島）沖おきを越こふる強盜がうたうの（千）氣きの荒浪あやなみも引沙ひきしはに（輝）ふちまち善ぜんに返かへる浪なみアノ臺拍子だいはやしの招魂社せうこんしやの（島）毎朝まいちう四時しよの朝清あさきよめ（千）不淨よじやうをはらふ鶏けいの（德）聲勇こゑゆうと夜明前よあけまへ（輝）くらも晴行はれゆくまのしめぢやなア

○時代狂言鸚鵡石の部

○勸進帳問答掛合

富 櫛 介 慶

富「猶父貴僧に問ふ事あり修験の道はいのなる事を旨とす
るや

辨「夫れ修験の法といつば胎藏金剛の兩部を旨とし嶮山惡
所をふみ開き世の害を爲す惡獸毒蛇を退治して現世愛
慾の慈愍をたれ或ハ難行苦行の功を積み惡靈亡魂を成
佛得脱させ日月清明天下泰平の祈禱を修す故に内に

と忍辱慈悲の徳を修め表ハ降魔の相をあらはし惡鬼外
道を威伏せり只神佛の兩部にして百八の珠數に佛道の
利益をあらはす

富「シテ又袈裟を身にまとい佛徒の形にありながら額に戴
く兜巾のいのに

辨「即ち兜巾襟掛は武士の甲冑に等しく腰には彌陀比利劍
を帯び手にハ釋迦の金剛杖にて大地を切開き高山絶所
を縦横せり

富「寺僧は錫杖携るよ山伏修験の金剛杖に五躰をかた



ひるそのいこれ

弁「事もおろかや金剛杖と天竺檀特山の神人阿羅々仙人の
 持し靈杖にて胎金剛部の功德をこめり釋尊未だ瞿曇沙
 彌とやせし時阿羅々仙人に給仕して苦行したまひや、
 功積り仙人この神力強勢をかんに瞿曇沙彌を更めて照
 普比丘と名付たり

富「シテ又修験に傳はりしは

辨「阿羅々仙人より照普にさづくる金剛杖かゝる靈杖あれ
 ば我が祖役の行者星を用ひて山野を經歷し夫より世々

あ是を傳ふ

富「佛門にありながら帶せし大刀は只ものたどさん料なる
 や誠に害せん料あるや

辨「是はさるゝしの弓に等しくおとしに佩の料あらき佛法
 王法に害をさす惡獸毒蛇はゆゑに及ばたとへ人間あ
 ればとて世をさまたげ佛法王法に敵する惡徒の一切多
 生の利によつて忽ち切て捨るなり

富「目にさへさり形あるものは切たまふべきがもし無形の
 陰鬼陽魔佛法王法に障化をなさば何をもつて切たまふ

や

辨「無形むけいの陰鬼陽魔いんきやうまの九字真言くじしんごんを以て切斷せつだんせんにあんのか
ふき事ことかあらん

富「シテ山伏やまぶしの出立いでたちハ

辨「即ちすなはちろの身みを不動明王ふどうめうわうの尊容そんようにかたどるあり

富「頭かぶに戴いたくときんいいかに

辨「夫それど五智ごちの寶冠ほうくわんにて十二因縁じふにいんごんのひびをとりて是これを戴いた

富「かたたる袈裟けさハ

辨「九會曼陀羅くあまんたのかさの篠掛すいかけ

富「足あしよまどひしとゞきハいりに

辨「胎藏たいざう黒色くろしよくのさいさをひかす

富「扱さて又またハツのわらんじハ

辨「八葉はちえうの蓮花れんげを踏心ふみこころなり

富「出入でいるいさハ

辨「あらんじの二字にを唱となるあり

富「抑おさも九字くじの真言しんごんといいのある義ぎよや事ことの次第しだいを問とひ

さん

辨「九字くじハ大事だいじの深秘しんひにしてかたり難がたき事ことあれども疑念ぎねんを

いらさんその爲に説聞せやべし夫九字の眞言といつば
 いはゆる臨兵闘者皆陣列在前の九字なり正に切らんと
 する時ときのさしくたつて齒を仰ぐ事三十六度右の大指
 をもつてさづ四徒をゑがき後に五横を書その時急々如
 律令を呪する時ときのあらゆる五隱鬼煩惱鬼まづ悪魔外
 道死靈生靈立所に亡ぶる事霜に熱湯をろくがごとし
 實に元品の無名を切る大利劍莫邪の劍もあんどしかん
 武門も是を呪する時ときの敵お勝つよと疑ひなしまだ此
 外ほかに修験の道疑ひあらば尋ねに應し答へやさん其徳廣

大無量あり肝きんにありゆけ人にかたる赤穴かしこく大
 日本にっぽんの神祇諸佛諸菩薩も照覽あれ百拜教首畏れみ
 つしんでや云々斯うんくかの通り

○伊達騷動対決の場

細川勝元
 仁木弾正

(勝)此願書の其方が手跡じやナ(彈)如何おも只今涉覽の如
 く(勝)フウスリヤ此印形も其方の實印じやナ(彈)コハ異成
 る事の涉尋夫迎も拙者が實印毛頭違へムりませぬ(勝)左を
 れバ其方が積惡相糺さねば成ぬへ(彈)恐乍ら身に取升て

積悪杯とい思ひも寄ぬ義てムリ升る(勝)イヤ何如程陳じて
 も逃れぬ證據の印形据へし此密書某し是へ來掛る途中手に
 這入たる密書の切端外記が處持の此密書と密接合し文書の
 契符合認めし其方が願書の筆意寸分違ぬ同筆印同何と是で
 も謀書と申の(彈)コハ怪りぬ抄仰謀書を構へ謀印を致す
 者が夫と一目は相解らう何迎工み申す可き其願書と拙者か
 印形能々抄改め下さりませ(勝)ヤア人面獸心とや云ん國
 賊どの汝のとコレ見よ此密書を謀書成と云せ間敷此印鑑令
 手鏡も取たる願書の名宛に押たる印形へ引目を入しり察す

る處即坐の巧み鬢髪を引抜印形成たる此文止切く解ら
 ざるは某しの眼を暗ませるか

俠客五人男之内

曙 源 太

イヤ姉さん留おさんナ是が堅氣の商人なら引込んでも居ら
 れやせうが皆抄存知の數寄屋川岸喜三郎と云れチヤア子分
 子方も大釜で年中喧嘩の焚出に日に何俵と焚喰も和けへも
 アリヤ強愈も有一粒撰の其中で負ぬ生米の曙源太此様臺詞
 も去年柄ふるせがつけはを熨斗代り焼て喰共煮て喰共片身お
 るされ皮造り切刻まれるも合点で兄貴の加勢に出来る柄ハ

えらゝ余つた相手ても血腥せへが初物の命を切手に爲る氣
だのお前も逃れぬ中落の骨を拾つて呉なせイ

侠客五人男之内

絳紅裏甚三

腕と云るゝ親分故引を取つチヤア歸るめいダ子分が聞チヤ
ア居られチへ其處ダ勝氣な人入家業江戸の三十六見附旅の
五十三次折六十九次宿々を股に掛ても草鞋の履を仁王の様
な駕籠昇りアアランの聲で昇ダせる音は響いゝ伊達師の元メ
其下請の血祭りヤア赤へが名代の絳紅裏甚三人より丈の短
けへが生れごち柄裏表袖ねへ事が大嫌ひ襟垢の手へ白子だ

ダ先が曲つゝ奥身あら直入行ぬダ産土柄寸々成夫迄ハ跡
へハ五分でも引ヤア仕ねへ

侠客五人男之内

前髪左吉

兄ハ手合み誘れてお先眞暗向見を前髪ごてら色氣のねへ麿
バ宜にと云れても見て居られぬが生附飽繫で賣込ゞ眞の
親父の面影のみ道中師でも箱根柄先の何處やら双六の繪で
見た計り知ねへダ江戸の内ヂヤア親分の光に輝く銀鎖前金
物の裏梅の花も苔の前髪左吉心の裏坐の横安利根附の丸く
行無が此所が伊達師の子分大細い烟管も頭勝凹されチヤア

了簡寺らねへ

侠客五人男之内

幻長藏

四人の中ッア年重の手前迄ッ大人氣ねへと叱れるのも合点
 で出掛て来ハ是迄ハ寒の臘月も法被一枚面肌に迄効を積み
 太鼓ガ鳴リヤ足袋徒跣振出す喧嘩の纏附何様アホリを喰ふ
 其跡へ引無我慢者命知ッと云れたも親分の手につて柄今ッ
 ア小差の頭分親方どの馬方どの人に云れる幻長藏銀造へ
 の脇差も斯云時に遣ハニヤア重ハ思へをするのハ無駄先を
 殺スル此方が死ウ血を見ぬ内ハ歸られねへ

侠客五人男之内

腕の喜三郎

「己も知悉に出掛て来ッ勘當を受何十年音信不通のお屋敷ガ
 此所に有共露知ッ源太が喧嘩の挨拶にウツカリ此處へ出来
 が名乗て見リヤア逸平と己どの同じ兄弟弟子如何で意恨ハ
 殘ッラッ表向ヒヤア師道へ對し先方も其儘歸つた譯事ニヤ
 ア己が勘當も未お免の出ねへ内ハ敷居の高い此道場一本持
 て往處ッ面小手掛ニヤア這入れねへ其稽古場へ手前達ガ向
 鉢巻繩襷真劍勝負ハ來て見る竹刀の竹の折る程己が身体を
 粉々ハ打殺されても濟ねへ義理門弟頭の逸平へ意恨を返す

の後日の試合負るハ勝と此儘にまど一緒に歸つてくれ

喜三郎妻れいそ

イ、ヤ遺れぬ遺れねへ内の人ダ居てあらバ引を取てと名の
汚れ死に行も合点で行と社云留ヤア仕ねへ其處ダ伊達師の
喜三郎腕と云れる其人の私も小指お成たる柄ハ切ても切ぬ
五本の内仮令源太か死ふ共愚痴や未練の云子へ氣ダが留守
お遣てハ私の粗忽斯して出掛て來柄ハ止り悪いハ承知だが
喧嘩の人の止ダ花此處ハ留ツて私にも花を持せて下さんせ
いなア

○鞍馬山多門堂の場掛け合

名古屋 小山三
不破 伴作
元岩 橋

(伴)未月も梢に在と葉隠で茂る木間の鞍馬山星も斑を雨雲
は晃く霧の稻妻ハ初雷鳴と夕立の景色見へたる春の霽(山)
緩く寒も霽あらでバラくどせしとこび雨毎夜く降し雨
つばさ夫よハ有ぬハの一羽離れて如月や梅ダ香に引替で
花立花の魁に(伴)誰に淡路の嶋千鳥浪打撞木子の刻に撞出
す鐘の數あふで九ツ叶ふ我願望(山)入ツの地極を過さしと

昇る嶮岨の多門堂闕て往來も七曲(伴)九十九折ある難所故
 未小山三來ぬ様子(山)モシ伴作が出抜て先へ木船の山續
(伴)包む思ひ岩橋の夜の契が意恨と成(山)角目立たる墨髪
 の朋友中も不破名古屋(伴)其鞞當の面影で笠の名よ呼都富
(山)我立袖も夜霞に腰卷羽織伊達姿(伴)紋に由縁の墨櫻
(山)家に因の木芽漬(伴)若衆出立も一對に(山)世を牛若の
(伴、山)脊競べ石(伴)扱社其方へ名古屋小山三(山)左云其
 方へ不破伴作(伴)未小山三と思の外最早此處迄來りしこの
(山)君命受し某を何故妨げを仕遣ぞ(伴)譬君命成へ迎一

且身共が願し役他人に成てハ刀の予前是非共身共へ譲つせ
 へ(山)余の事成ハ兎も角も大事な役目の譲れぬ其處を開ひ
 て通し召れい(伴)望掛つた其役目譲ぬ内ハ何時のな通さぬ
(山)成ぬと有ハ武士の意地刀に掛ても通さニヤ置ぬ(伴)處
 を通さぬ此方も意地づく(山)此處ハ場所も鞍馬山彼御曹司
 が昔お倣ひヨシヤ天拘の術有共(伴)先鋭き刀の稻妻(山)
 雨に玄鳥の飛鳥の働さ(伴)イヤ此場で(伴、山)一と勝負
(岩)マアく待て下さりませ(伴)誰かと思へハ腰元岩橋
(山)女の身ふて大胆な(伴)人も恐怖魔所あるに(山)何故是

へ(伴)山(山)参りしど(岩)サア此岩橋が参りしは祇園の社で紛
 失の百がひの繪巻物寫す役目を蒙れば父宗丹も疑ひ掛り
 繫る娘の身で何卒雪さへ廻る鞍馬山多門堂にて託宣を伺
 ひたさに只一人怖々乍ら來掛道主の誰ども白刃と白刃月も
 朧に見渡せば雲に稻妻雨ふ玄鳥伊達な摸様のお二人様と知
 てお止め申升るの承りらぬを争ひの元の矢張伺ひのれ役目
 故でふりませう争ふ物の中よりと平常柄不破をお二人の中
 を結ぶの名古屋帯只何事も岩橋に其お役目をお譲り下され
 中能白刃を元々へお納成れて下さりませへ(伴)岩橋其方が

頼成ど(山)一旦扱たる刀の手前(伴)血を見ぬ内の元々
 (山)納められざる(伴)武士の意地(岩)スリヤ此様に申ても
 (伴)何時かな聴ぬ不破伴作(山)小山三迎り同様事(伴)怪我
 爲ぬ内に(伴)山(退た)く(岩)イ、エ退れぬ何卒私へ(伴)
 山)エ、面倒ぢ

○松金屋離坐敷の場掛合

番頭 善六
 丁稚 久松

(善)よ、爰の矢張松金屋の離坐敷(久)待久しさを眠氣さし
 思す爰でトロくど(善)眩を枕の一と寐入有々見たる向嶋

(久) 誰も夫どの白髭の森の此方を土手續(善)れ主の後家と
 差向(久)覺悟極て二人共(善)命を掛てしつぱりと(久)心の
 勞と云乍(善)不思議あとを三回の(久)覺て心も隅田川夫あ
 ら今のわ夢で有たか(善)何の事たア手前ハ久松トヤア無か
 (久)眞にお前の番頭さん(善)何して手前ハ此處へ來のだ
 (久)ハイ私ハアノ何でムリ升(善)アノ何でハ解ねへ何しよ
 來のぞ(久)ハイ儲若旦那多三郎様が何か此處の内へ多用ダ
 有てお出被成升たに依て密々の用事を申上に參り升た(善)
 シテお袋さんの用か誰の用ぞ(久)ハイアノお袋さんのお用

でハムりません(善)シテ誰に頼れて來のだ(久)ハイアノね
 染さんのイエ〜お染物の汚注文のことが分り兼升と紺屋柄
 中て參り升た柄お聞申に參り升たのでムリ升る(善)夫あら
 早く行て内の掃除でも仕ろと云のお(久)是よ付ても今見
 事が正夢に若も成たら如何為様ぞ(善)思はぬ事ハ見ぬとや
 ら日頃の思と船の内(久)身に怖しい大それたお主を執へて
 不義淫行(善)始ハ如何やら耻しそらにア、コレ待など云乍
 ら(久)何ぞお用でムリ升るか(善)誰が呼だ(久)今待と仰り
 升た(善)ソリヤア此方の話ぞ何を愚圖々々(久)テモ今見た

夢が氣お成故(善)夫さら買様も(久)忌を夢を(善)見たり
(久)ハイ(善)ア、夢の字僧の(久)エ(兩人)煩ひじやナア

○曾我對面の場掛合

曾我十郎祐成
工藤左衛門祐經

(工)然も昨年四月下旬鎌倉殿のお供にて心成ずも殺生を奈
須野に於て御狩の折(十)淺間の麓奥深く入間の原を狩盡し
又も涉狩を信濃路の月の名所も涉原野にて(工)續く霖雨に
久方の旭の光雨上り(十)三浦殿より借受し駒に跨り此所彼
所(工)獲物を求め深入成し狩出す鹿の跡追駈(十)二二争ふ

弓張の矢荷心に駿足を(工)乘損せしお手前へ落馬致して
彼地此地の(十)目指獲物を見失ひ(工)切て放せし一筋の(十)
硯の外て此矢の根(工)借に祐經落手致した(十)寶の山へ入
乍ら(工)望を失ひ無念成か左も左右づとも有る然し覘し
獵物ですら落馬致して失ふ程武運拙き男等兩人及む望を
立んより思ひ止り祐經を一家と頼み其身を立父の家名を起
されよ

○天神記車引の場掛合

時平公梅王丸
松王丸櫻丸

(梅)何と聞か櫻丸齋世の宮管丞相を憂目に逢せし時平の
 大臣存分云ふとや有舞(櫻)成程々々能處で出會した(櫻、梅)
 車遣ぬ(杉)ヤア何者あれハ狼籍爲す見れば松王が兄弟梅王
 に櫻丸だふ、聞へ主に放れ扶持に放き氣が違ふての狼籍
 か但の又此車時平公と知て留たか知ず留たか返答次第用
 捨の爲ぬぞ(櫻)ヤア云ナ〜氣も違はぬハ此車身違へも爲
 ぬ時平の大臣齋世親王菅丞相讒言に依て御鎮洛其無念骨
 髓徹し出會處が百年目思ひ設し今日只今櫻丸と(梅)此梅
 王牛に手馴し牛にぶた位自慢で喰ひ肥た時平殿の尻こぶた

二ツ三ツ四ツ五六百喰とさねハ堪忍成ぬ(櫻)云れぬ主の肩
 持顔出社張て怪我仕るぐな(杉)ヤア法に過た案外者夫れ打
 延せエ(杉)命知ずの暴れ者孰もお構有る此松王が湯主人へ
 の奉公始め兄弟一ツで無と云働さぬ目に掛んコリヤやい松
 王が引懸た此車留られる者あら留て見よ(櫻)ホ、ウ櫻丸梅
 王爰に無い率知ず一寸也と遣て見よ(松)何と小瀧な(時)ヤ
 ア牛扶持喰らふあを蠅めを轆に止ッて邪魔ひろるハ轆に掛
 て曳殺さん(梅)ヤア左云大臣を曳殺さん(時)ヤア時平に向
 ひ推参なり(松)何と我君の御威勢見たか此上手向爲るとお



八十七



八十六

目通りで一討だぞ(時)ヤア松王待金巾子め冠を着すれば天子も同前太政大臣と成て天下の政事を執行ふ時平が眼前血を絞らすの社参の穢れ助悪い奴をれど下郎に似合ぬ松王が働き忠義に免じて助て呉ふ命冥加な蛆虫めら(松)能兄弟を
 持て兩人共仕合せ者命を拾ふて有難い忝な心と三拜せよ(櫻)
 己にも言分有共親人の七十の賀祝儀濟迄喃梅王(梅)オ、其上での松の枝々へし折て敵の根を絶葉を枯さん(松)オ、此松王も親人の賀を祝ふ跡で梅も櫻も落花微塵足元の明い内早く行けく(梅、櫻)歸るを己に倣はふや

○三門の場掛合

真柴大願久吉
 石川五右衛門

(五)春の詠い價千金とい少い譬五右衛門か爲に此價万兩最早日も西に傾き眞に春の夕暮くれの櫻も一入々々ハテ麗かな詠めじやナアハテ心得ぬ此鷹が我を恐す羽を休むるハ正敷是ハ名畫の筆勢然も白斑コリヤ是此村大炊之助が手跡血沙を以て認めしハテ心得ぬ何々(コリヤ)此村大炊の事露れ早生害致せしよ奇(オム)ソリヤ此村大炊と云しハ我父の宗蘇郷よて有しよ知ぬ事とい云乍ら殘念あり我幼さ

時風波を凌ぎ何卒父に對面遂んと漂泊ふ内明智光秀が撫育
 に預り成長して名も惟任左馬五郎と呼然に光秀春永父子を
 打取四海を掌握せんとすと雖も僅三年大願久吉夕爲に亡さ
 れ無念の最期其恩儀を受し我なまを光秀殿の弔ひ軍久吉を
 討取んと打死を止り世を忍んで今石川五右衛門と名乗る所
 に國で別し實父宗蘇郷も久吉夕爲の圖ずも落命無念に無念
 を重る仇返すべくも残念なり是迄心を合せし大炊之助を父
 共我が子共知で喜せし親子の心外鷹の知せに死後の紀念と
 成たるか然し父が無念光秀殿の恨假令此身の油で煮られ肉

ハ蕩け骨ハ一ツくお碎る共此無念を晴さいで置ふの己久
 吉覺ぬておらふ(久)石川や濱の眞砂ハ盡る共(五)何ガ何と
 (五)世に盗人の種ハ盡まし(五)エイ(久)順禮に御報謝

○白蓮住家強迫の場掛ケ合

鬼 薊 清 吉
 ね さ よ

(清)コウおさよ手前が世話お成て居た白蓮が家の何處ど
 (五)大さき聲をしなさん直向ふごよ(清)ム、好家ぶな高
 張附の玄關構へ名目附の貸附處ださ(五)何だか知無が大層
 金が有よ(清)夫が此方の附目を(五)眞に縁と言物の異を物

どのう死ぶと計り思ひ切て坊主に迄成た私が髪を延して死
 ぶれ前と斯して一處又成と云ふア何したと云のぶらう(清)
 是が眞に腐れ縁ぶ己も手前故にやア構を喰ひ天窓の段々延
 て來が金の悉皆摺て仕舞其處柄拂と氣が替り悪い事の覺へ
 易く僅一年立無内に傍書の附身体も成た朱に交ををバ赤く
 成と何日手前も板の間柄美人局強迫やら好持人に成たナア
 (さ)此様事も私の家ジャア株の様も成て居たが意氣地が無
 柄仕あかつぶお前が彼昇進る柄恐怖乍ら爲る様を物の然
 し直の附焼及嘸皆様のお心シア廢バ宜にと思召すだらう夫

と思ふと耻か敷よ(清)ソリヤ己だつて同事ぶ強迫杜騙や盜
 人の鼻の高いの眼が大きなか塞身な處が無チツヤアいけ無
 見る影も無些な小野郎夫せへ未一ツ竈眞の度胸で致仕事
 手前も己と縁有て斯一處も成た柄ニヤア互に力も成合て今
 年ア一番持がうせ(さ)先手始に向ふへ往て且突にぶつかつ
 て見様(清)己も一處に這入の(さ)お前の門も待て居ぬへ私
 が先に仕掛る柄(清)エ、黒つぶく成て來わへ

○上使の場

根井行親

「オ、上意の趣き承知とい去とい悪了見義仲滅後の日影の

と横柄權威も檢使の役目粗忽有てへ家の破滅とシツト無念
を堪えし切あさ御推量下されい

○捻花寺鍾樓堂の場 鐘樓守鈍念

「ヤイ猪助能聞よ僅五十か百兩の目腐れ金を遣たを髻を切
て追放さるを餘事なしのテモ坊主今九ツを八ツと撞鐘樓の鐘
へ自由お成る足の裏へ踏付た飯粒程な切米を貰ツて居たを
恩に着せ目先へブラ下つた出世の蔓を取込す白痴が今時
有物か我と違て此お兄様の生付馬鹿堅い事ぶお嫌だ義理や忠
義を辨へて此世智辛い世の中が片時でも渡れる物か石動様

に頼れて一時早く兄弟が命を縮る時を撞還俗爲て立身する
のメ何で我も死果體迎も死あら冥土迄主人の供と死出の旅
三途の川や未年も廿三夜を一期として運の撞坐に命の捨鐘
寂滅爲樂と鳴響く鐘樓の鐘を引導に此捻花寺の露と成れ

○捻花寺鍾樓堂の場 萩原猪助

「コレ貴兄邪ま非道の和郎も私ダ云事能聞しやれや未お
前が鈍六逆鷺津のお家に勤る頃先日那の御年回よ高野へ納
る金を預り乍紀州へ往途中にて有ふとか室の津の廓よ遊び
其金を遣ひ口論仕出擲取れお主様へ耻辱を懸たる其身の不

届是が他の御主人なら重きお咎有る可きを落慈悲深い故元
 を糺せば佛の事鈍六が命助け得ざる程に恩を思ひ出家
 と成り先祖の菩提を弔へとは追放被成て今お命が無恙世に
 在の皆お主のお影大恩あるお主様の八ツを限のお命を一時
 早く九ツに縮様と道徳を夫に引替此猪助の九ツに七ツを
 撞て貫ひ何卒お命助度お前ふ此事頼んと小影に待て聞える
 密談仮令百万石も取立られ黄金の山を築るゝ共何で加擲の
 成べきを今社御恩の送り時頼の七ツを撞ならバ撞木の緒さ
 へ善の繩心を正敷持替て思直して被下兄者人間譯の無上柄

の人手の晴ぬ思込だる我念力病氣乍ら此猪助七ツの鐘をや
 るか撞いで置可きか折も折迎残念な瘡の病の再發も惣身顛
 る自由も成ぬがチエ、口惜仮令兄もせよお主の爲みの替
 られぬツウツヤ

○六段目切腹の場

早野勘平

「御両所先々暫くくお待被下へ○亡君の御耻辱と有る一
 通り申開かん御両所共お下お座つてお聞被下へ○夜前彌
 五郎殿にお目に掛り別て歸る道々も金の工面お兎や角と心
 も暗き闇紛れ山越す猪に出合二ツ玉の強薬切て放せば誤也

借に手答へ駈寄見れば、如何も猪に有で旅の人ヤ、南無三寶薬の無かと懐中を探て見れば手に當る薬に有で金財布道成ぬ事どの知乍ら天より我も與る金と推頂さ直も追付貴殿ふれ渡申し徒黨の數も入たしと悦び勇で立返り様子を聞ハ情なや金の女房を賣た金打留たるハ外舅殿〇如何成ハ勘平ハ三左衛門が嫡子と生れ十五の年より涉近習勤百五十石頂戴をし代々搦治のは扶持を請束の間涉恩を忘れぬ身が色に耽つた斗りで大事の場所にも居合せを其天罰よて心を摧さ御仇打の連判の加りたさに調立の金も却て石瓦鴟の

隊程齟齬ふ言譯なさに勘平が切腹成たる身の成行涉兩所方涉推量被下い

〇白蓮住家強迫の場

白蓮 寶の 大寺正兵衛

「清吉悪い事ハ仕無者だナア〇如何にも手前が推量の通り頼朝公から極樂寺へ佛の爲の資道金三千兩納ツとナラリト聞た地極耳其晚仕掛て己が盗た他人の物の我物と濡手で安房から上總下總常陸を掛て寺々へ仕事し這入た片名よ呼れ然も大寺正兵衛と云己も以前の盗人だコリや素人よやア斷せ予へ盗人一代一晚も三千兩の愚なと千兩でも固めチ

ヤア滅多に盗める物じやねへ其處で此處が止時と仲間の者
 もも別て遣足を洗つて其金柄思付ての貸附會所五兩十兩貸
 金も難儀者者もヤア利足も取空月切無に仕て置故お佛々ど
 人にも云れ今心やア道お落た物せへ見向も仕無堅氣に成り
 誰一人疑ふ者無く枕を高く寐て居たが天道様が許さ無浮然
 出さ先刻の封金外の者ならシヲを切何處が何處まで言張る
 見答られさ名し直ふ今で名腕の鬼薊逃ぬ事故明したダ
 譬にも云壁は耳最浮々と此土地も己も足り留ら無旅へ出
 掛て元の盗人斯打負て言柄ニヤア隠しヤア仕無が三千兩も

手元在に在ハ二百ウ三百殘す手前に遣ふ柄婆に居る内一日
 でも甘へ物でも澤山喰ひ仕度事を爲るが宜必ず身おヤア附
 無柄堅氣に成ふと思ふさよ此正兵衛が宜手本だ

○白蓮住家張迫の場

鬼薊清吉

「証據と云ハ外でも無頼朝公ウら納つゝ資堂金の三千兩封
 印押さハ己が役知無者が見た日ニヤア打込拔の三文判字証
 も臍お分ら無が寺に居た丈鮮りに見え透く証據の三千兩此
 封金が有た柄にヤア目申ハ拔無大盜賊白眼だ事ア五分でも
 透無僅七分か一寸の此封印が鑑の証據印形押して受合た

○日枝山の場

木曾冠者義高

「今仮寐しと思し、怪敷窮鼠の顯れ出、笈よ入置。旭の御旗近
 付寄て喰取走るを遣じと跡追て何共知ず。暫時の間、此所の
 何處か白雲に峰も分さる深山に誘き入たる怪敷鼠跡追懸る
 某しに郊立立ひろく此奴の曲者我苟くも木曾義仲の嫡子と
 して怨敵頼朝に世を狭められ斯る姿に打扮も元より菩提を
 吊ふ爲成せ勇士を相譚義兵を擧げ父の怨を晴さん爲斯く零
 落を見下して獸に迄侮れ重代の旗迄失ひしかア、我乍口
 惜イデ此上の彼巖を打碎さ今の妖鼠を追留て旗を取得で置

可さうヤ今失ひし我旗を怪敷僧の手に在るハ正敷汝が仕業
 よナア

○鎌倉御所詮義の場

御所五郎丸冬保

「是ハ仕たり景高殿お詞社心得を冬保自身に召達し己
 が功を揚るに非を武門の習忠義の爲組敷相手の名にし負ふ
 五ヶ莊の主たる伊東が孫の時致故雜人共の手あ掛を某し自
 身に繩取致す

○鎌倉御所詮義の場

源頼朝公

「左程君臣の道を糺す其方々何故武邊よ係り無吉備津の宮

の神職たる大藤内を害せし何等の趣意の有つるや其意を得ざる不審の二ヶ條罪無き者を殺害爲り大丈夫の身よ非ざる所業時致答の如何成るぞ

○影芝居鸚鵡の人真似終

明治十八年五月廿日出板御届
明治十八年七月卅日出板發兌

(定價十五錢)

編輯兼
出板

東京府平民

井澤菊太郎

芝區愛宕町三丁目
五番地

發兌

伊勢屋金治郎

日本橋通り壹丁目

再板發行廣告

○影芝居鸚鵡の人真似 初編

右ハ先般發賣仕候處大方之愛顧を蒙り忽ち品切に相成候に付今回再板發行致し間倍舊涉高評之程偏ふ奉希候敬白

4-73

Vertical text on the left side of the page, possibly a title or header.

Vertical text in the middle-left section.

Vertical text in the middle-left section, below the previous block.

Vertical text in the middle-right section.

Vertical text in the middle-right section.

Vertical text in the middle-right section.

Vertical text in the middle-right section.

Vertical text in the right section.

Vertical text in the right section.

Vertical text in the right section.

Vertical text in the right section.

Vertical text in the right section.

Vertical text at the bottom left of the page.

63

56